
転生したら錬金術師

蕾姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したら錬金術師

【Nコード】

N6840X

【作者名】

薔姫

【あらすじ】

高校生の男だった俺は、ある日とつぜん神様のミスで死にました宣言されることに。おわびに異世界で特殊能力付きで転生させてもらう。まあこれはこれでいいかと言うことで、魔法の世界なのに魔法の一切使えない主人公が、その世界にはない錬金術師としてほのぼの過ごしていく。あつ、一話あたり、2000字〜3000字ぐらいと短いです。

プロローグ（前書き）

異世界転生ものは初めてなのでグダグダになるかと思いますが、ご了承ください。

プロローグ

「あなたは死にました」

俺の目の前で小学生ぐらいの女の子が、無駄に大人ぶった態度で話している。

「はい？まてまて、状況が全くつかめないんだけど？」

いったいこの人は何を言い出すんだろうか。

俺は実際に今生きてるし。

「もう一度言います。あなたは死にました」

またもや何か言い出した。これはもうあれに違いない。

「……あー、宗教の勧誘なら結構です。俺、神様とか信じてないんで」

「あなたの目の前にいる神様の存在を全否定ですか？」

もう喋るのがめんどろになってきた。

ん？今何かさらにと変なこと言わなかったか？

「だ・か・ら、私が神様であなたは死んだんです」

これはもしかしたら、あの病気かもしれない。

「小学生なのに厨二病ですか？大変ですね」

「厨二病じゃないですよ。詳しく説明すると、あなたは私のミスで死んでしまいました。生き返らせるのは神様の規則的に無理なんで、

前世の記憶と少しチートな設定を持つて転生させてあげよう。って言ってるんです」

むきになって子供が怒り出した。スルーしたいが、無視するとめんどろそうだな。

「何となく分かった。でも、その詳しい説明を早く言ってくれないと分からないんだけど」

「言わなくてもそれぐらい察してほしいんですけどね」

子供のくせに。と思ったがまた絡みがめんどくなるのも嫌なので言わないでおこう。

「うん、俺が悪かったよ」

「えっ？」

さっきまでと俺の態度が違うから、なんかあわてだした。よし、このまま押し切れば……。

「それにしても、神様って凄いですね。間違えて死なせたから転生させてあげる。って言われなきゃ分からないのに。さすがは神様、心の広いお方だ」

なんだか、褒められるのも満更でもないって様子で言葉を紡ぎだす。

「その優しさは胸に刺さるからやめてほしいんですけど……」

とにかく。とそこから続けて

「異世界になら転生させることができます。希望があれば規則の範囲であれば叶えてあげます」

「そんなこと急に言われてもなあ……」

腕を組んで考えるポーズを取りながら、最近読んだ漫画から考えをひっぱりだす。

「じゃあ、魔法とかある世界にしてくれ。それで、俺は錬金術師としての能力と知識が欲しい。錬金術師なんだから科学や医療の知識についても。できる？」

我ながら、これはいかにも主人公最強とかになるんじゃないかね？って設定だと思う。

なぜ最強の魔法使いになかったのかというと、魔法の世界で魔法使いて普通じゃん？ならいつそ他とは少し違う存在の方がカッコいいじゃん。

「その程度なら出来ます。なら転生させます。いいですか？」

俺が小さく頷くと目の前が真っ白になる。

「おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ」

真っ白になったと思ったら、その先は生まれた直後でした……。

ってマジか？

普通こうゆうのって3歳とか5歳で前世の記憶が戻るんじゃないや……

って言うよりもマジか？
マジでここからスタートとか、出鼻くじかれるわあ……。

まあいつか。

とりあえず、ある程度までは普通の赤ちゃんを演じて、そこからは少し天才な子供程度でいいだろう。

そこで、男の人が二人で話している。

「残念ですが、お子さんの魔法適性はFで魔法の才能はありません」
一人の男が、もう一人の男に話している。

魔法適性とは、つまり魔法の才能だろう。

俺には一応は錬金術師の才能があるから、魔法適性は欲しいけど無

くても困らないだろう。

「……そうですか。でも、この子は僕たちの子供だ。魔法の適性なんてなくても立派に育ててみせます」

おそらく今話したのが父親だろう。金髪の無駄に美形のイケメンだ。イケメンとリア充は爆発しろ！

「そうですね。…では私はこれで」

父親と話していた男が出て行く。それと同時に父親が俺を抱きかかえ、さきほどまでとは異なる親バカ全快の表情をしている。

とりあえず、これからの目標は……

5歳までは普通の子供を演じよう。

今の父親の表情を見るかぎりでは、少し変なところがあっても『ウチの子は天才だ』とか言っただけで流してくれるに違いない。うん、そう信じよう。

子供の体だから泣きつかれたのか、急に眠たくなってきた。

精神的には前世の年齢（つまり15歳）なのだが、体の年齢は0歳なので、体の方にしただけで眠るとしよう。

第二の人生が幸せなものでありますように。

ブログ（後書き）

誤字、脱字、質問があれば感想欄でお願いします。
読んだら感想と評価欲しいです。

あとできればお気に入り登録も！

1話 初挑戦（前書き）

どう書けばいいのかわからないのでグダグダになりましたが、読んでくれると嬉しいです。

1話 初挑戦

「ルイス様起きてください、お食事の時間です」

「分かりました。着替えたら行くと父様にお伝えください」

「かしこまりました」

そう言うのと、この家で住み込みで働いているメイドのアリスさんは出ていった。

よし、話す相手はいないが今の現状を説明しよう。

僕の名前はルイス・アルクイン、5歳です。親バカな両親と使用人数人でアルクイン家の屋敷に住んでいる男の子です。

ちなみにこの世界には魔法がありますが、錬金術師としての才能を神様に貰う代わりに、魔法は一切使えなくなってるみたいです。魔法適正はFランクですから。ちょっと魔法も使ってみたいなと思ってることは内緒です。

「おはようございます。父様、母様」

「おはようルイス」「おはよう、ルイスちゃん」

先に挨拶してきたのが父様のアレン・アルクイン

この地域の領主様で、門から屋敷まで馬車で行かないとしんどいらいの屋敷に住んでいる。

まあ僕も住んでるけど。

次にルイスちゃんと呼んできたのが母様のシェリー・アルクイン

いつも僕を『ちゃん』付けで呼んできては抱きついてくる親バカです。

ちなみに父様はその光景を羨ましそうに見ています。

「突然ですが父様、僕ももう5歳です。遠くまでは行かないので屋敷の裏にある庭で1人で遊んでもいいですか？」

僕の質問に父様は少し考えながらこつちを見ている。

よし、ここはあれしかないだろう。

上目遣いで父様をちらちら見てみる。

「はっ」と小さく声をあげた父様は決心がついたのか、僕に何かを言い出す。

「特に危ないだろうから、いいぞ。でも、川や池には近づかないようにな」

「分かりました」

満面の笑みでかえしてあげると、父様はどこか満足したのか気持ち悪いぐらいの微笑みが顔に残っている。

「ルイスちゃん、お日様がちょうど真上に来る前に帰ってくるんですよ？」

「分かりました」

こちらにも満面の笑みでかえしてあげると、母様もどこか満足した表情を浮かべている。

フツ、ちよろすぎる。

こつちは5年間も無垢な少年を演じてきたんだ。演技だけなら今ならハリウッド映画にも出れそうな気がする。髪も金髪だし。

「やっぱり心配、ルイスちゃん、私もついて行くわ」

朝食の後に外に出ようとしたら母様が言ってくる。

だが、この程度は予想の範疇なのだ。

「ついてきたら母様のこと嫌いになりますよ?」

悲しそうな表情で言ってみると、母様は心の中で葛藤があるのだろうと思わせるほど悩み、何かを決断したのか僕の方を見てくる。

「私はルイスちゃんが帰ってきた時にお腹空かせてるだろうから、ご飯の用意をしておくわ」

親バカな母様にとっては息子に嫌われる事態は避けたいようだった。

「では、行つてきます」

玄関で頭をペコリと下げながら言つと、母様は僕が見えなくなるまで手を振ってきた。

いやいや母様よ、一生の別れじゃないんだから。

母様と別れたあとは、10分ほど歩き屋敷の側にある草原までくる。

そして5年間我慢し続けた錬金術を試してみようと思います。

転生した時の知識で、錬金術については知識として頭の中にずっと入っている。

錬金術のルールについても入っていて、

・質量保存の法則の上に成り立っているため、密室の中ではその空間内にある元素でしか練成できない。

つまり、ある密室空間内に炭素が50gしかなかったら、炭素50gのできる物しかできないのだ。

だが、例外として密室でない場合だと異なる。

50gの炭素の固まり

・物質を構成している元素が分らないと練成できない。

大きなルールはこんな感じになっている。小さなルールに関しては……省略してもいいので以下省略。

そして、構成物質を知るために、錬金術以外にも神様からチートな能力を貰っている。

それは、目で見たものの情報を知りたいと思うと、頭の中にもともと知っていたかのように知識として入ってくるのだ。

地面を見れば、土の構成元素が何%の割合で含まれてるのかまで分かる。

大気を見ても同じだ。

そして、目で見て土の構成成分を見る。

掌を合わせてから、地面に両手を置き、土を何に変えたいのか明確なイメージをする。

両手を中心に練成陣が広がり、一瞬光ると目の前に小さな土のゴーレムが出てきた。

「やった、成功だ」

思わず騒ぎ出してしまう。

そして僕と同じようにゴーレムを踊っている。

どうやら僕と感情がリンクしているらしい。

「戻れ」

心で唱えて口にも出してみると、さっきまで踊っていたゴーレムが土に戻りその場に崩れ落ちる。

それから土でいろいろ作ってみて、新たな願望が生まれてきた。水は氷になるのか？と言う疑問だ。

大気中の水蒸気でやればいいんじゃない？って思いやってみる。

練成の過程で周りに集まった水蒸気が周りに熱を放ち、周囲の温度が一瞬だけ上がる。

そして目の前にはイメージしたとおりの氷のブロックができた。

そこからさらにやりたいことが出てくる。

空を飛んでみたい。

魔法使いを選んでいたらできたのかもしれないが、錬金術師は空を飛ぶことができるのか？と考える。

しばらくボーっとしながら考えていると、一つの結論に辿りつく。

「今は保留」

将来の自分考えて。

他人任せではないが、他人任せなかんじがする。

まあそんなことはいい。

そして転生ものと言ったら定番のアレがないことに気づく。

「使い魔的な霊獣欲しい」

眩きながら、また思う。

魔法使いじゃないのに使い魔って違うなあと考えていると太陽が既に真上まで来ていた。

「早く帰らないと母様が心配してしまう」

時間はいっぱいあるから、これから考えればいいか。

と言う、さっきまでの脳内で繰り広げられた議論は無駄になった。

僕が帰ってきたら母様が『心配だったわ』と泣きながら言って抱きついてきたのは、言わなくても分かるだろう。

1話 初挑戦（後書き）

誤字・脱字があれば感想にお願いします。
評価と感想書いてくれると嬉しいです。
あとお気に入り登録もお願いします。

2話 新しい家族は靈獣さん（前書き）

2話目に入り、早くも文章を書く才能がないと思わざるを得ないです
ね。

グダグダに更新してますが、よろしくお願いします。

2話 新しい家族は靈獣さん

「母様、今日も裏にある森へ行ってきます」

「分かったわ。ルイスちゃんは川や池には近づいてないだろうからいいわよ」

初めて行ってから今日で5日目になったのだから、母様の対応も慣れたもんだ。

「では、行ってきます」

頭を下げて言くと「早く帰ってきてね」と言いながら、見えなくなるまで手を振り続けている。

ここは変わっていないらしい。

こういうところが母様とは言え可愛くみえるのは秘密だ。

ちなみに母様は23歳で父様も23歳なので、精神年齢的には3歳しか変わらない。

なんでも母様の家と父様の家は貴族で、二人が生まれる前から家通しの付き合いがあったらしい。

そのせいで昔から一緒に遊ぶことが多く貴族では珍しい相思相愛で結婚したらしい。

両親は親バカだがそれだけ夫婦仲もいいので、妹か弟ができる日も遠くはないだろう。

その時は精一杯可愛がると決めている。

そんなことを考えていると、いつもの草原についた。

草原と言っても学校の教室1つ分ぐらいのスペースが森の中に空いているだけの空間と言う認識もできる。

だが、いつもと違うことに今日はすでに先客がいた。

小さな子犬のような生物が丸まって自分の足をなめている。
見るとひどい怪我をしている。おそらくは他の動物にでも襲われた
のだろう。

「怪我してるみたいだけど大丈夫？」

動物には理解できないだろうが話しかけてしまうと云うのは、皆一
度は体験したことがあるだろう。まさに今がそれだ。

『来るな』

誰かが話す声が聞こえる。だが、周りには誰もいないし。聞こえ方
も少し変だ。

「誰？」

そう呟きながら辺りを見渡すが誰もいない。いるのは目の前の子犬
だけだ。

「そしかして君？」

そう言つて子犬を見つめが警戒しているのか何も答えずに犬歯をむ
き出しにしている。

「僕は敵じゃないよ。怪我してるみたいだから心配しているんだ」
そう言いながら近づいていくと、子犬は少し後ずさりながらも、犬
歯むき出しで威嚇してくる。

『こんな傷は1時間もすれば治る。汝^{うぬ}に心配される筋合いはない』
確かに聞こえた。でも、子犬は威嚇したままで全く口を動かしては
いない。

だが、一応はコミュニケーションはとれるみたいだ。

「僕は医学の知識があるんだ。怪我してるのに放っておけないよ」
素直な気持ちをのべる。

『たしかに貴様の心から悪意は感じ取れない。それに汝は我と同じ
ようなものを感じる』

「僕はそんなの全く感じないけどね」
そう言う子犬は足元まで来て、こちらを見上げてきていた。

「とりあえず僕が治療してもいい？」
『汝にまかせる』

そう言う子犬は怪我してる足をこちらに向けて寝転がる。
どうやら治療しろってことらしい。

「じゃあ、やるね」

そう言うて、目で見て構造を確認する。

地面などではなく生物なので、DNA単位で見て塩基配列を知識として頭に入れ、そこからアミノ酸配列を確認し、タンパク質の立体構造なども確認し、治療を終えた後の明確なイメージが頭の中に完成する。

イメージを固めるのにおよそ2秒。地面よりは遅いが、それも仕方ないだろう。

そして、掌を合わせて右手だけを怪我してる場所にあてる。

手を中心に練成陣が広がり空気中と地面から必要な元素が集められ、復元される。

それも一瞬光った間に行なわれ、次の瞬間には傷が塞がっている。

「よし、生物でも成功した」
成功の喜びが口から出たが、子犬は目をきょとんとさせて、こちらを見ている。

『これが魔法なのか？』

魔法が見たことないのか、そんなことを聞いてくる。

「違うよ。これは錬金術と言ってね、僕しか使えないから秘密にしておいてね」

『汝は他の者とは違う。だから、汝が我と同じようなかんじがしたのか』

何か一人で納得してるみたいだが、全くついていけない。

「じゃあ、君も僕と同じで特別なの？」

子犬は少し考えこんだあとに、また話しかけてくる。

『我に親はいない。この世界によって生み出されたものだ。汝達は我らのような生物を総称として、霊獣と呼ぶらしいがな』
霊獣と言われても全くピンと来ない。

「総称ってことは他の種類もいるんでしょ？君はその中の何て生物なの？」

純粋な好奇心からの疑問だった。

『雷獣と言うらしい。2日前に生み出されたのだが、生まれた時からある程度の知識が頭の中にある。それによればそう言う名前らしい』

「ふーん、ねえ、帰るところがないなら僕の家に住まない？」

『汝は悪人には見えぬし、悪意も感じんからそれもいいかもしれんな』

よく分からないが、OKされたらしい。
やった、ペットGETだ。

「そういえば、さつきから汝^{うぬ}って呼んでるけど、僕の名前はルイス・アルクイン。ルイスって呼んでよ。そういえば君の名前は？」
これから一緒に暮らすんだから、名前ぐらいは知っておきたい。

『ない。……我は生まれてそれほど経ってないから名前などない。ル、ルイスが決める』

いきなりの無茶ぶりだった。

「毛が白っぽいからシロ？…はなんか変なかんだし……じゃあ、これから毛が銀色になりそうだからギンってのはどうか？」
けっこう自信がある名前だ。

『ギンか、悪くはないな。ルイスが付けてくれた名だ。それでいい』
ギンは少し照れているみたいだった。

「じゃあ今から屋敷に帰るけど、ギン步ける？」
そう聞くと、ギンは頭の上に乗ってくる。
生まれてそんなに経ってないからか、それほど重くは感じない。

「そうだ、ずっと疑問だったんだけど、ギンって口開けてなにに、どうやって喋ってるの？」
頭の上にいるから見えないが、一応は目だけは上を向けて聞いてみる。

『ルイスの頭に直接語りかけてる。そうしないと会話ができないんでな』

その答えに「ふーん」と答え、それから屋敷の前につくまで無言で過ごしていた。

屋敷の前まで着き、一つのことを思い出す。

「ねえ、屋敷の中では僕以外の人にはあんまり喋りかけないでね？
たぶんビツクリしちゃうから」

『そのくらい分かっている』

その答えに安心して「ただいま帰りました」と言いながら屋敷のドアを開ける。

母様はギンの小ささと可愛さで飼うことを即許してくれた。

父様は少し気乗りしてなかったので、親バカなのを利用して、涙目
+上目遣いで頼むと即OKが出た。

その様子にギンが『家では猫かぶってるのだな』と言ってきたが、
両親の前なのと答えるのが面倒だったので無視しておいた。

その日はギンと同じベッドで寝たが、子犬みたいな見た目通りで抱
き心地がよく暖かかくて気持ちよかったのは内緒だ。

そういえばギンが自分を雷獣だと言っていたが、もしかして雷出せ
るのかな？

それができたらギンってかなり強いのでは？

と思う、ルイス・アルクイン5歳（精神年齢は20歳）だった。

2話 新しい家族は靈獣さん（後書き）

誤字・脱字があれば感想までお願いします。
評価と感想とお気に入り登録お願いします！

3話 従兄妹のクレアちゃん（前書き）

今回も新キャラだして更にグダりましたが、ご了承ください。

3話 従兄妹のクレアちゃん

「というわけで今日はルイスの従兄妹のクレアちゃんが来るから仲良くしてやるんだぞ」

朝食の席でいきなり父様が言い出した。

「父様、話の前置きがなかったので全く理解できないのですが……」
突然のことに母様までも驚いている。

「今日からアーサー兄さん達が一週間泊まりにくる。ルイスはクレアちゃんと一緒に遊んでやるんだぞ」

泊まりにくるというのは年に4回ほどあるのだが、いつもいつも当日に言うので僕も母さんも少しビックリするのだ。

「じゃあ、今日の夕食はご馳走作らなきゃね」

母様の趣味は家事と料理なので、夕食も母様と使用人のアリスさんで用意する。

だから、この家に使用人はアリスさんと庭番のクリフさんだけだ。

「いつも通りでいいさ。いつも美味しいし、何回も来てるんだしさ」
いつも美味しいと言われて母様は照れて何も言えないみたいだ。

「ギンもいじわるせずに一緒に遊んであげるんだよ？」

僕の椅子の横で朝食に肉の塊を食べてるギンに話しかけると、こちらを見上げるように見てくる。

『分かってる。我が霊獣だとバレるとめんどろだろうからな。適当

に犬っぽく振舞っておく』

生まれてそんなに経ってないのに、ギンは頭がよすぎる気がする。これって頑張れば頭に喋りかけなくても普通に喋れるようになるのでは？と思ったが、ギンが普通に喋りかけてくるとそれはそれで気持ち悪い。うん。

「それで父様、クレアちゃん達のいつ到着されるのですか？」

ギンと喋る時は普通でもいいが、両親と喋る時は無垢な少年っぽく喋らないといけないからめんどくさい。

「電話では昼前に着くと言っていたな」

思い出すように顎に手をあてて答える。

昼前なら朝のうちは裏の山に行っても平気だろう。

朝食を終え、外に出かけようと玄関まで来たところで突然扉が開く。

「アレン、これからしばらく世話になるな」「お世話になります」

金髪で見た感じは貴族がある男性は、父様の兄のアーサー伯父様だ。年齢は父様より2つ上

それに続いて入ってきたのが、銀髪がよく似合う整った顔立ちのエマ伯母様。年齢は母様と同じだ。

エマ叔母様のあとに入ってきたのが、クレアちゃん。エマ叔母様と同じ銀髪の良く似合う整った顔立ちで将来は確実に美人になると思う。

「伯父様、伯母様、こんにちわ」

「こんにちわルイス君、クレアをよろしくね」

伯父様は簡単な挨拶だけして父様のところへ行ってしまう。伯母様にクレアちゃんの世話を頼まれてしまった。

「じゃあね」と言い残して伯母様はクレアちゃんを残して伯父様の後について父様への挨拶に行ってしまった。

「じゃあクレアちゃん、何して遊ぶ？」

「おままごと」

何の躊躇いもなく即答する。

だが、しかし

「おままごとはいつもやってるから他のこととして遊ぼうよ」

クレアちゃんが来た時はいつもおままごとしかしていないのだ。もう飽きたし、精神年齢が二十歳の男性にとっておままごとなんて恥ずかしくてやりたくないのだ。

「いつもやってるって、クレア以外の女の子ともおままごとやってるの？これってお母様が言ってた浮気ってやつなのかしら。浮気はダメですわ？」

伯母様はいつたい自分の娘に何を教えてるんだと問いただしいが、もしかしたら伯父様が浮気していると疑ってるのかもしれない。余計なことは言わない方がいいだろう。

「してないよ。クレアちゃん以外におままごとやる人なんていないし。でも来た時はいつもおままごとだから、たまには他のこともいかなって思ってたんだ」

笑顔で言うところクレアちゃんは何かに討ち抜かれたような反応をしてから、真剣な表情を返してくる。

「クレアって呼んで。『ちゃん』はつけなくてもいいわ。それに将来はふーふになるんだから、おままごとで練習しといった方がいいって母様が言ってたわ」

そう、クレアちゃんは子供でよくある『私、　のお嫁さんになる』宣言を僕にしてきたのだ。それをされたのが4歳の時と早すぎる気はするが、クレアちゃんの両親も何故か賛成しているらしい。

そこは『うちの娘は嫁にはやらん』ぐらいのことを言ってくれた方がよかった。

それに、いくら体が5歳とはいえ、精神的には二十歳なのだ、こんな……どう考えても犯罪の匂いしかない。それに断じてロリコンなんかじゃない。

「じゃあクレア、従兄妹どおしで結婚なんて無理だよ？」

この国にはそんな決まりはないが、5歳の子供ならそれで信じるだろう。

「お母様は、『そんなこと些細な問題だ』って言っていましたわ」だから、伯母様は自分の娘になんて教育をしているんだ。

「とりあえず今日は子供らしく外で遊ぼう」

この話を続けると娘の教育について真剣に話し合う事態になりかねないので、話題の転換を試みる。

「いいですわ」

そう言っ僕の後ろについてくる。やっぱり年相応な子供なんだなと思ってしまう。

見た目的には同じなのだが……。

着いてみて気づく。

あっ、クレアちゃんがいるから錬金術の練習できない。

そして思考すること10秒。一つの子供らしい遊びを思いつく。

「ギンは走り回って逃げてね、僕達はギンを捕まえるから。捕まったらギンの夕食は半分没収ね」

普通に頼んでもたぶんやる気を出さないの、夕食を脅しに使うとギンの耳と尻尾がピクツと動き、一目散に逃げていく。

「じゃあクレア。これからギンを捕まえるけど、危ないから離れたらダメだよ？」

「はい」

そう言つて、クレアちゃんが僕の手を握ってくる。どうやら、手を繋げと言つことらしい。

まあそれぐらいいいかと思ひ。それに答える形で手を繋ぐ。

クレアちゃんの顔が少し赤い気がするが、気のせいって思つておこつ。

「じゃあ行くよ」

そう言つて二人で一緒に歩きながらギンを探す。

昼食までに何回かギンを見つけたが、すぐに逃げられる。さすがは霊獣。俊敏さだけでも凄すぎる。

昼食の後ギンを追いかける遊びをして、夕食の後は、僕の部屋でクレアちゃんに転生前の世界での昔話をしてあげると、かなり好評だった。さすがに眠ってしまった。

そして、僕、クレアちゃん、ギンの2人と1匹で同じベッドで寝ることになった。

3話 従兄妹のクレアちゃん（後書き）

誤字・脱字は感想まで。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

4話 師弟関係

クレアちゃん達が王都に帰ってから2日後

「父様、僕も町に行ってもいいですか？」

今日は父さまが領主をつとめる村の様子を見に行くと言っていたので、ぜひとも外の世界を見ておきたいものだ。

「そうだな……ルイスもこの地域の領主になるかもしれないし、連れて行ってやろう」

今日は親バカな部分に訴えかけなくても許可されたいらしい。なんとも珍しい。これは子離れまでそう遠くないかもしれない。

「そこにまたがって……上手いじゃないか。やっぱり俺の子は天才だ」

訂正。やっぱり親バカすぎです。この人の親バカは死ぬまで治りません。

父様が僕のすぐ後ろに腰掛ける。

それと同時に馬が走り出す。

スピードは分からないが体感的には自転車おそれほど変わらないくらいだ。

そのスピードのまま10分もしないうちに村についた。
ん？

馬に乗ってたのって玄関から門までじゃないですか。

家の敷地内で馬を乗り回すって、どこの貴族さんですか？

まあ、このあたり治めてる領主さんですけど……。

これからは町にも遊びに行ってみよう。

町は街と言うほど人が多くなく、田舎の中にある少し賑わってる所ぐらいの賑わいだ。

家の数は50世帯ぐらいあるので都会よりの田舎、つまり中途半端な田舎だ。

とりあえず父様はいろいろと見てまわるそうなので、どこかで遊んでるようにと言われた。

別に錬金術があるから大丈夫だが、普通の5歳児なら何があるか分からないことを自覚してほしい。

服の首元からギンが顔を出す。

『なあルイス、人間が住む町ってのはこんなに大きいのか？』

屋敷しか見たことがないギンが聞いてくるが、この世界での町の大きさが分からないので、何とも言えない。

「分からないよ。僕も町に来るのは初めてだからね。でも、王都はもっと広いんじゃないかな？」

ギンと話しているが、周りの人にとっては、ただの頭の可笑しい子供に見えるんだろうか。

変な噂がたつと父様も大変だろうと思い。何かギンも言ってきているが無視することにした。

そしたら、少し拓けた空き地のような場所で子供が遊んでいるのを見つける。

そして一人の少年が声をかけてくる。

「見ない顔だけど誰だ？それに女のくせに男みたいな格好してるって変じゃねえか？」

某猫型ロボットのアニメに出てくる、イジメっ子みたいな奴が声をかけてくる。

それより、こいつ凄いい勘違いをしてないか？

「はじめまして、僕はルイス・アルクイン。あと、僕は男の子だよ」
屋敷の人以外だと口調が変わるとギンが言っているが、ここでギンと話すときつかく友達ができそうなのに台無しになる。まあこんな子供の友達はいらないが、母様が心配しても困るし。

「お、おとこ！？」

その場にいた男の子が2人と女の子が1人が驚いて聞き返してくる。たぶん全員見たかんじだと2歳ぐらいしか変わらないだろう。

「そうだけど、何か変ですか？」

全く理解できない。可愛い男の子だと自分で思うことはあるが、女の子に間違われる程だと思ってなかった。

「女の子にしか見えないもん」

唯一いた女の子が驚きがまだ表情に残ったまま話す。

茶色の髪に目鼻立ちが整った顔立ちが台無しだ。だが、この子は可愛くなると思う。美人って言うよりも可愛くなるな。

それより、今発覚した新事実、僕は男の娘でした。

これからも間違えられるようだったら、けっこう憂鬱になるな。

いや、確かに可愛いと言われるのは嬉しいけど、男の子に生まれたんだからカツコイイと言われた方が嬉しいに決まっている。

「で、ここに來たってことは俺達と遊びに來たのか？」

何の自意識過剰？って思ったがこんな子供には理解できないだろう。そもそも見た目は僕の方が子供なのだが。

「そう捉えてもらっても構わないよ」

「じゃあ、改めて自己紹介からするね。僕はルイス・アルクイン。

ルイスって呼んでよ。それで、こっちはギン」

ギンも普段は吠えないのにワンと犬っぽく吠えて自己紹介っぽいかんじを出す。

「俺はエドウィン、エドって呼んでくれ。それでこいつがセシル。そっちの子がイヴだ」

ガキ大将っぽい奴はエドウィンって言らしい。セシルと紹介された子も、僕の方を見て笑顔を向けてくれ、イヴも「よろしく」と言っている。どうやらわりと歓迎されているらしい。

「あつ、そういえば。この村で一番強い人ってどこに住んでるか分かる？」

これは今日の目的の一つだ。

「それなら村の端っこに住んでるダンさんだな。何でも冒険者としてけこう有名だったらしい。今は村の警備をやってるから、たぶん村で一番強いはずだ」

俺の質問にエドがすぐに答えてくれる。口調のわりにいい奴みたいだ。

「ごめん、ちょっとその人に用があるから、今日はもう帰るよ。また2日後にここに来るよ」

そっぴい残して空き地から出て行く。初対面なのにすぐに帰ってしまい悪印象を与えてしまったかもしれない。と少し不安な気持ちに駆られる。

村の端まで行き、どれがダンさんの家なのか一目で分かった。壁に斧やら剣やらが大量に立てかけてあるのだ。

盗まれる心配をしていないのかと少し不安な気持ちになってしまう。

ドンドン

一応ノックしておく。マナーですから。

「誰だ？」

低い声で家の中から尋ねてくる。

「はじめましてルイス・アルクインです。今日はお願いがあって来ました」

そう言う中から足音が聞こえてくるのでドアの方に向かって来ているらしい。

出てきたのは、くすんだ金髪に筋肉質な体つき、これだけでも強そうと思うのだが、極めつけは目の横から縦に入っている刀傷だ。

「見ない顔だな。たしかルイス・アルクインと言ったな、アルクイン家の坊ちゃんか俺に何か用か？」

その疑問は正しいが少しバカにしてるような気がしてイラッとする。

「ダンさんがこの村で一番強いと聞いたので頼みがあつて来たのです」

「僕を弟子にしてください。この世界で生きていくための力が欲しいんです」

真剣な目で目を見て告げる。

「アルクイン家の力があれば一生生きていくには心配ないはずだ。剣術なんてあつても意味ないぞ？」

たしかにそうだ。アルクイン家の力があれば生きていく分には全く問題ない。

「親の敷いたレールの上を走るよりも、自分の力で駆け上がった方が楽しいじゃないですか。そのために剣術を学びたいんです」
嘘はついていない。いつかはアルクイン家から独立しようと考えているのだ。

「分かった。でも、条件がある。両親からの許可を貰うこと。あと、何となくだが、お前は他の人間に隠し事をしてる気がする。師弟関係になるんだ。それは話してもらおう。まあ無理にとは言わないがな」
少し考えてしまう。転生者だと告白されて信じる人間がいるのだろうか。

「誰にも言わないでもらえますか？」
さつきよりも真剣な目で言う。

それを察したのかダンさんも真剣な目を向けてくる。

「ああ」

その言葉で意を決して全てのことを告げる。

転生して再び生を受けたこと

この世界とは違う世界に住んだこと

神様に貰った能力の錬金術のこと

ついでに、ギンが霊獣だったこと

全てを驚きつつも納得してくれたらしい。納得したと言うよりもそういうものと理解したって感じらしい。特に錬金術で実際にゴーレムを出してみたら、かなし驚いていた。

そして人前では使わない方がいいとの注意もつけた。

どうやら5歳のわりに大人びているから怪しいと思って聞いたただけだったらしい。

ちょっと悪乗りがすぎるんじゃないですかね　おじさん。

「今日はもう帰れ。修行は明日から始める。刀は俺が用意しとくから動きやすい格好で来てくれたらそれでいい」

そう言いながら本日初めての笑顔を見せてくれた。気難しい職人みたいな人かと思っていたが、意外と陽気なおっさんなのかもしれない。

「はい、明日からお世話になります」

父様との集合場所に行き、帰ってから弟子入りのことを話すと父様は賛成してくれて、

反対するだろうと思っていた母様も「男の子は女の子を守るくらい強くなりなさい」と言っていたので、意外にも賛成だったようだ。

そして、明日から始まるであろう修行の前の夜はギンを抱き枕に早めに眠ることにした。

4話 師弟関係（後書き）

またまた新キャラです。しばらくはこのメンバーで落ち着くと思いますが、修行の様子とかどう書けば…とっているのもまたグダると思います。がご了承ください。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

5話 新たな秘密と知られる秘密

ダンさんとの修行は子供と言うこともあり週に3回、月曜と水曜と金曜だけ行われる。

そして教えられることも基本的なことばかりで、ダンさんの出してくる宿題もつらい。

宿題の内容は素振りが一日1000回だ。

もう少し体が大きければ問題ないが、5歳の体に1000回の素振りはきつすぎる。

初日で筋肉痛になり2日目からは筋肉痛も痛くて、時間がやたらとかかる。

普段は修行が休みの日も当然のように素振りをするのだが、今日は違う。

母様の出産が近いのだ。

そのことが気がかりで修行どころではなくなってしまうのだ。

そして生まれてくる子供が男の子か女の子かは、医者先生は魔法を使って知っているのだが、父様が生まれてくるまでの楽しみらしく教えてもらわないことにしてるらしい。

「ルイス君こんなところでどうしたの？」

屋敷のベランダでいろいろ考えていた時に声をかけてきたのは、医者であるリア先生だ。

見た感じでは20代後半なかんじだが、実際は30代の後半らしい。女性と言うのは実に恐ろしい生き物だと思う。

「母様が心配で外の景色を見て落ち着いていました」
年相応な少年っぽい笑顔で答えるがリア先生の顔は恐ろしいものでも見るような目をしている。

「アルクイン家の長男は魔法は使えないが天才だ、と言う噂は本当だったのね」
さきほどとは違う驚きの表情だ。

「なんのことでしょうか？」
本気で分からないので素直に質問してみる。

「私の5歳の時なんて両親でべったりだったわ。それなのにあなたは自分で考え自分で行動している。そして、普段は子供っぽい表情で隠しているけど、あなたの中には大きな何かが眠っている」
最後のやつは直感なんだけどね、と最後に付けだし、外の景色を見る。

「つまり、僕は他の人とは違う、異常ってことですか？」

「5歳児がそう考えれる時点で十分異常なんだけどね」
笑って言い放ち、さっきまでとは違う真剣な表情になりさらに続ける。

「そういう一面は隠して生きなさい。他の貴族に知られたりしたら断りきれない養子の話とかがたくさん来て、あなたの両親が悲しむことになるわ」

心配してくれているのは分かる。
だが、ここまで分かるのは何か秘密があるのではないだろうか。

「リア先生が僕の中に何かが眠っていると思ったのは何かの魔法ですか？」

この時にはすでにする表情じゃないだろう。

そして、先生も子供を見る目ではなく一人の大人と真剣な話をする表情になる。

「私の魔法は治癒系統の魔法も使えるんだけど、発動具がないから使えないの。それで生まれつきの魔法は発動具なしでも使えるんだけど、私は意識すると人の潜在能力を見ることができのの」
一呼吸置いてさらに続ける。

「ルイス君に適している魔法はないから魔法は使えない。でも魔力は人並み以上に持っている。そしてルイス君からは私のような生まれつきの魔法が一つあるのと、全く魔法とは異なる異質な力が眠っている。そう見えているわ」

今の説明から分かることは、異質な力と言うのは錬金術のことだろう。

だが、生まれつきの魔法とは何のことだ？

神様が転生時つけてくれた能力は錬金術以外にあるとは考えられないから、たまたま生まれた時に先天性の魔法を身につけてしまったのかもしれない。

「その先生みたいに生まれつきの魔法を使える人って多いんですか？」

先生は首を横に振ってから答える。

「こう言う能力は一年に5人ぐらいしか生まれないわね。先天性の魔法はね、消費魔力は少ないし、あらゆる分野に特化したものが多いの。私のは先見の明ね。攻撃特化の能力の人は国軍の特殊部隊に所属するのが普通ね。」

今ので一応はどんなものか理解した。

つまり、魔法を使えないと思っていたが、実は一つだけなら使えま

すよってことらしい。

「でも変なのが、魔法を使えない人は魔力を持たない人。魔力が人並み以上なのに適した魔法が全くないって人は聞いたことがないよ」

どうやら俺はこの辺も規格外らしい。

「でも、先天性の魔法があるんだから何とかなるわよ」
そう言って笑ってベランダから出て行こうとする。

その時、いきなりドアが思いつきり開いて、慌てた様子の父様が入ってくる。

「先生、シェリーの出産が始まったみたいです。すぐに来てください。ルイスも来てくれ。命の誕生をその目で見てほしい」

「分かりました」

リア先生が言いながら小走りにかけて行く。それに続き母様がいる部屋まで行く。

中にはベッドの上で苦しんだ様子の母様がいる。

そしてしばらく慌しい時間が続き、リア先生が母様に声をかける。

「頭が出かかっていますよ。ここからが勝負ですよ」

その言葉を聞いて父様は安心したような表情に変わった。

そして無事に出産は終わる。

生まれてきたのは女の子。女の子が欲しいと父様と母様で言っていたので、父様は嬉しそうな表情をしている。

だが、様子がおかしい。

嬉しそうな父様とは対象的にリア先生の表情は険しい。

その前にはひどい出血の母様がいる。

長時間での出産で限界を超えてしまっていたみたいだ。

生まれながらの医学の意識で分かる。

このままだと死んでしまう。

治癒の魔法が使えれば大丈夫かもしれないが、リア先生は発動具がないから使えないと言っていた。

つまりこの場に治癒魔法を使える人間はいないのだ。

治癒魔法を使える者はいないが、錬金術を使える人間はいる。

人体に試したことはないが、ギンの治療はできたから人間もできるだろう。

まずは構造を見て、どこが悪いのかを見る。どうやら出血多量らしい。放っておいたら死んでしまうレベルだ。

この世界には輸血と言う概念はないだろう。錬金術のことを打ち明けるのは、もっと大きくなってからと決めていたが、思わぬところでその時がきてしまったみたいだ。

覚悟を決める。目の前で悲しそうな表情で、生まれてきた子を抱きながら佇んでいる父様の横を無言で通りすぎる。

父様は一瞬名前を呼ぼうとしたが、5歳の子供とは思えぬほどのオーラを感じさせ黙らせる。

そして助けようと必死に治療しようとしているリア先生の横まで行き、声をかける。

「少し下がっていてくれ……俺がやる」

口調が変わっているが、これが転生前の口調。必死になって思わず地が出てしまっているが、誰も指摘できないほどのオーラのような雰囲気がある。

言われたとおりリア先生が下がるのを確認してから、

胸の前で掌を合わせ、母様の体に触れる。

掌から母様の体が全て入るぐらい大きい練成陣が広がり、一瞬光ったあとには治っている。

やったことは単純でDNAの塩基配列から血液を構成している部分を読み取り、その通りに血液の成分を空気中などから必要元素を取り込んで、増血させ、傷口も塞いだのだ。

母様は疲れて眠ってしまっているようだ。

父様とリア先生は俺のしたことが信じられないのか、驚きを隠せない表情をしている。

「あつ、…え、えーっと…」

「ルイス、シェリーが目を覚ましたらちゃんと何をしたのか説明してくれないか？」

「分かりました」

その日のうちは母様は目覚めなかったので、夜のうちはどう説明するか考えながら眠りにつく。

5話 新たな秘密と知られる秘密（後書き）

異世界転生ものと言ったら妹ってことで妹を生まれさせました。

この後の展開ははつきり言っただけでほとんど考えないのが現状ですね。いつも書きながら考えているので。

これからの展開につきましては、せきるだけ面白く、自然に読める展開を意識して考えていきたいと思っています。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします

6話 告白

母様が目覚め、父様、母様、リア先生、つまり母様の出産の現場にいた全員が集まっている。

昨日母様が出産した女の子、エリンも母様に抱かれ、今は眠っている。

「と言うわけなんです」

僕がどや顔で言うのと全員が困惑しているみたいだ。

「いきなりそう言われても分からないぞ、ルイス」
いきなり言い始めたのだ、当然の指摘である。

「チツ」

今の舌打ちが聞こえたのか両親が一瞬驚いた表情を浮かべる。

「カクガクシカジカです、はい」

父様の指摘通りで説明した。アニメや小説の世界では読者はもう既に何があつたのか読んでいるから説明はいらないだろう。

「カクガクシカジカでも分からない。ちゃんと話してくれないか？」
さつきからのをふざけた態度と取られたのか、父様が少々怒り気味だ。

ここからはまじめに話そう。

「つまり……僕……いや、俺は20歳です」

まずはここから話さなければならぬ。

「は？」

こいつは何を言っているんだと言う目を向けてくる。
だから言ってやりたい。何を言わせてるんだと。

「何か？」

そう尋ねると、母様が代表して聞いてくる。

「ルイスちゃんは私とアレンの子供よ。だったら20歳じゃなくて5歳よ」

可哀想な人でも見るような目で見るのはやめて欲しい。

「たしかにこの世界での年齢は5歳ですが、こことは別の世界で過ごした年数も含めると20歳です」

またしても全員が状況を掴めていないみたいだ。

まあ、それもそうだろう。自分達の5歳の息子がいきなり異世界に住んだ年数を含めると20歳です。とか言い出したのだ。俺だったら即病院に連れていっているはずだ。

「理解は出来ていないけど、とりあえず続けて頂戴」
母様に促され続きを話す。

「とりあえずキャラを作るのも疲れるんで、素で話しますね。

まず簡単に言うと、俺はことは違う世界に15年間住んでいました。そこで不幸にも死んでしまい。この世界に前世の記憶を持ったまま再び生を受けたと言うことです。」

けっこう省略した気もするが、大体こんなもんだろう。

「それでシェリーに使った治癒魔法のことなんだが……たしかルイスの魔法適性はFランクで魔力はあるのに魔法は使えなかったはずなんだが……」

父様が言いたいのは、つまり魔法が使えないはずなのに魔法を使っ

てたがどうゆうことなんだ？と言うことだろう。

「あー、それは説明するより見てもらった方が早いんで……」

そして掌を合わせ、目の前にある木のテーブルに掌を置く。一瞬光った後に掌には木刀ができている。

その光景が信じられないのか、全員が目を大きく見開いている。そしてずっと黙っていたリア先生が口を開く。

「魔法のようにも見えるが発動具を持っているようにも見えない。それに武器を強化する魔法なら聞いたことがあるが、武器そのものを作り出す魔法など聞いたことがない」

言いながら俺が発動具を持っていないか確認している。

通常発動具は指輪や腕輪、ネックレスなどのアクセサリー類が主だ。これは自分の魔力をいったん経由させるのに魔法石を用いる。

だから魔法を使う魔術師は発動具を持っていないといけないのだ。

「その答えは簡単です。俺は魔法なんて使ってません」

につこりと年相応な笑顔を浮かべる。

「じゃあ、今のは……」

そこまで言ったところで、俺に返答を求めてきたようだ。

「これは錬金術と言う技術です。魔法は自分の魔力を持って何かを生み出す能力^{ちから}。でも、この錬金術は違います。錬金術ではその空間にあるものを使うので魔力は必要ありません。その空間にある物を俺が好きなように扱える。」

例えば、土からゴーレムを生み出すこともできるし、空気中の水分から氷を作ることも可能です。もちろんそれと同じやり方で、母様の体も治療しました。」

そう言うのと全員理解はできてないなりに納得はしているみたいだ。

「その錬金術？で私を助けてくれたのは分かったけど、その技術は他の人は使えないの？」

母様の言いたいことは分かる。この技術があれば怪我や病気の患者がかなりの割合で少なくなるだろう。

「残念ですがこれは転生時に神様がくれたおまけ能力みたいなものなので、俺以外の人は使えません」

申し訳なさそうに言うとう母様とリア先生は少し残念そうな表情をする。

その中で父様だけが少し悩んだような表情をして話し出す。

「ルイスはずっと子供だと思っていたが、十分に大人なんだな。その口調もそうだが、これからは俺達には構わず自分の好きなようにしなさい」

こんな話を信じてもらえないと思っていたが信じてくれたらしい。それどころか、自由に生きてもいいとのこと。そこに悲しそうな表情の母様が声をかけてくる。

「そうね、でもルイスちゃん、私達のことも必要ならいつでも頼って頂戴ね、家族なんだから」

その言葉が嬉しかったのか、少しムズツとする。

「母様ありがとうございます。あともう一つ秘密にしたことがあるんですが……ギンおいで」

そう言うその後ろに控えていたギンが俺の前まで来る。

「ギン、みんなに挨拶してくれる？」

全員が何を言っているのか分からないみたいだ。

他の人から見れば犬に喋りかけている少年と、それに分かったと言わんばかりに頷いて答える犬だ。

『ギンだ、これからよろしく』

素っ気無い挨拶だが、全員はギンがいきなり頭に直接喋りかけてきて、驚きが隠せないといった表情になっている。

それよりも全員驚きすぎだ。今日だけで寿命が2年ぐらい縮んでいくかもしれない。

「まあ見て分かれるとおりでギンは霊獣です。詳しく言うと雷獣です。

」

俺が転生者だと言うことは驚きつつも理解できていないのか中途半端な驚きだったが、ギンが雷獣だと言うと一人の例外もなくかなり驚いている。

「えっ、どうしたんですか？」

俺の質問には父様が答える。

「賢獣はこの世界にたくさんはいないが少しはいる。でも雷獣と言ったら賢獣の中でも妖怪の中に分類される。妖怪の賢獣の数はかなり少ないんだ。俺も普通の賢獣なら何度も見たことがあるが、妖怪の賢獣と言うと見たことがなかった。げんに一生見れない人間の方が圧倒的に多いんだ」

そう聞くとギンってかなりレアなのでは？と思ってしまふ。

「それにさっきまでの話も含めてだが、ルイスは15歳になったら王都にある魔法学校に行った方がいい。魔法学校に行けばその時点で使い魔を持つことを許されるから正式にギンを使い魔にすることだってできるんだ」

まさかの提案で受けたいのは山々だが、問題が一つある。

「俺は魔法は使えません。魔法学校には入学できないと思うのです

が……」

そう魔法が使えないのに魔法学校に行ってもしょうがないのだ。

「ルイスには錬金術があるだろう。念のために発動具も持っていたら、独特の発動方法だなくらいにしか思われないだろう」

障害になる大きな理由は改善されそうだが、魔法学校に通えるのは成人してから15歳からなのだ。

今すぐ決める問題でもない。

「では、父様、魔法学校の入学まではまだ10年あります。それまでに決めると言うことでよろしいでしょうか？」

「分かってるよ」

父様もそのつもりだったらしい。なら、最初からそう言ってくれば良かったのだが……。

「では、話すべきことは話しました」

そう言って席を立つとすると、父様が、最後に、と言ってこちらに何か話してくる。

「その錬金術のことはルイスが信頼できる人以外に話したらダメだぞ？」

と言ってきた。リア先生にも前に言われた気がするので一応は分かっていたつもりなんだが……。

「分かりました」

とりあえず、それだけ告げて自室に行き、この世界の歴史書を読み、いろいろな側面からこの世界の歴史を知っていくと言う、今のひそかな趣味の世界に行くのだった。

6話 告白（後書き）

異世界転生ものではお馴染みの家族に秘密を告白ですね。
これまではルイスの口調や地の文が書きにくかったので、これで少しは作者的には楽になります。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。
評価・感想・お気に入り登録お願いします

7話 魔の森？

「じゃあ行つてきます」

筋肉痛も起こらないぐらいには筋肉も付いてきた。

ダンさんとの修行がない日は町の人から聞いた家の裏の森の先にある魔の森までギンと行っている。魔の森との境界には大きな川があり、魔物は渡つてこれない。

それに魔の森までは普通なら歩いて1時間はかかる。

でも、そこに心配はない。だって俺……錬金術師ですから。

裏の森を抜けるのには自転車で行く。

何故自転車なのかって？

そんなの簡単だ。バイクまでは作れた。でも、ガソリンがないから動かなかったのだ。

父様はバイクに驚いていたが、「これなら少し弄れば自分の魔力で動かすことができる」とかい出しただのだ。あくまでも作ったのは俺。なら、今は技術的に無理だが弄るのも俺がやる。

それにバイクをやめたのには他にも理由がある。身長が……足りないのさ……フツ。自分で考えても笑えてくる。どうして作る前に気づかなかったのか……。

そのような点も含めて自転車で妥協したのだ。

それでも、さすが自転車。歩いて1時間の道のりも自転車だと20分ほどで到着するのだ。

そして大きな川まで到着するといつも通りに錬金術で川を凍らせ、そのまま自転車で走って行く。

ちなみにギンはずっと走りっぱなしだ。どうやらギンはまだまだスピードが出せるみたいだし、雷獣と言うのは恐ろしいよ全く。

魔の森に着き辺りを探索。そして出会った魔物とのエンカウントバトルだ。まるでポ モンでもやってるかのごとく魔物達は襲い掛かってくる。

そう考えていると、また十匹のゴブリンが襲い掛かってきた。

名前は錬金術使用前の構造を見る目で見たら情報として入ってきたので分かった。

魔物には名前はなく。全てがゴブリンならゴブリンと言ったかんじだ。

そして、その全てが全身が緑色で赤い目をこちらに輝かせながら、筋肉質で斧を持っている。

最近分かったことだが、ゴブリンに知能はほとんど無く、本能のままに生きているらしい。だからこそそのエンカウントバトルだ。

俺は基本的には錬金術の実践トレーニングなので剣術は全く使わない。

なので、錬金術を使う。

掌を合わせ、作りたい物をイメージしながら地面に掌を置く。

一瞬光った後に、目の前に体長が3mはあるゴーレムが姿を現す。

ゴーレムは俺が頭の中で指示した時以外はオートパイロットで目の前の敵を倒しにかかる。

今回も同じで、一匹が突っ込んでくる。それに合わせて右腕を振り上げる。その直後にゴブリンは姿を消した。

いや、姿を消したように見えただけで、ゴーレムの一撃で10mは吹っ飛んでいったのだ。

ゴブリンは体長1mほどしかないが、10mも飛ばされればしばらくは動けない。

今度は残りの9匹で襲い掛かってくる。

ゴーレムも同時には相手にできないらしく、ゴブリンの斧による攻撃を受けている。

だが、その刃がゴーレムの体に傷をつけることはできない。

そうやって戦っている間にもどんどんゴブリンは吹き飛ばされて、倒れていく。

最後の5匹になったところで、ゴブリンが一匹俺の方に襲い掛かる。俺とゴブリンの距離が2mほどになったところで目の前で小規模の落雷が起きる。

あまりの眩しさに一瞬目を閉じて、目を開けた時には目の前のゴブリンは全身に火傷でも負ったのか真っ黒の塊にまっている。たぶん死んでいるのだろっ、真っ黒になった体にヒビが入り割れたのだった。

「ねえギン、俺一人でも十分戦えたんだけど……」

これは事実である。そのまま突っ込んで来てたら錬金術で言えないが凄いいことになっていた。

『そんなことはいいじゃねえか。とりあえず気持ち悪かったから殺しただけだよ』

口調変わってんじゃね？って思った人もいると思うが、その通りだ。俺が『僕』から『俺』に変えてからギンもこのような口調で話すようになったのだ。

可愛い子犬のくせに妙に生意気な台詞を言いやがる。

『それにルイスがやると、さらに気持ち悪いことになる』
そう言いながらギンはゴーレムの方を見ている。

いつの間にか、最後の一匹になっていて、それを上から殴りつけて潰したのだった。

自分が出したゴーレムなのになんか怖いですね、はい。

そして時刻も昼になったので、魔の森にいる魔獣でも狩ることにした。

魔物は生まれながらにモンスターで人の害でしかないのだ。

魔獣は魔力の影響で巨大化して凶暴化した動物のことだ。

なので魔獣は食べると意外と美味しいのだ。

そう思っただけで探していると、目の前に鹿が元になったであろう魔獣が出てきた。

体長は普通の鹿とそれほど大差ないが、全く違うのは角だ。

角の長さが2mは越えている。横にも3mぐらいはあるので、攻撃を避ける時はけっこう苦労するのだ。

それにこの角は武器に加工もされるぐらいなので、当たるとかなり痛いと思う。たぶん串刺しですね。

そんなことを考えている俺には全くかまわずに魔獣が突進してくる。掌を合わせていつもの錬金術の体制に入る。

そのまま空中に手を出すだけでもいいのだが、どこかに触れてないと変なかんじなので、地面に掌を置く。

魔獣との距離は7mぐらいになったところで、魔獣が急に足を止める。

それも簡単なことで、俺が空気中の水蒸気を凍らせて、魔獣の足と地面を固定したのだ。

そして動けない魔物のところまで行き、掌を合わせてから掌を魔獣の毛皮の上に乗せる。

一瞬光った直後には魔獣は死んでいた。

何が起こったのかと言うと、錬金術の反応は

『分解反応』『構築反応』だ。

錬金術にかなり慣れてきた今では、分解反応だけとか構築反応だけのみでも行えるのだ。

今回は分解反応のみを使い、血中の赤血球を全て破壊したのだ。

赤血球を破壊されれば、全身に酸素が行き渡らなくなって、窒息死させられるのだ。

近くにあった木を練成して薪を作り、その場で焼いて食べることにした。

火はギンの雷で着けることができる。

焼きあがった魔獣は二人で仲良く食べる。

そうは言っても俺は5歳の子供なのであまり食べないのだが…、ギンのやつがかなり食べる。

今はあまり大きくなってないが、しばらくしたら俺よりも大きくなりそうで少し怖いです。

昼食も食べ終わり、夕食のおかずに魔獣でも倒して帰ろうとしてたところに、大きな緑の巨人がやってくる。

「ねえギン」

驚いてギンの顔も見れない。視線は緑の巨人に釘付けだ。

『何だルイス』

ギンもこちらは見ていない。

「ゴブリンって大人になったらあんな風になるの？」

いまだ視線は目の前の5mはある大きな緑の体に釘付けだ。そしてその赤い瞳と目があった。

（あつ俺…これから殺される）

そんなことを一瞬で思わせるほど殺気立っていた。

『さあ』

ギンが投げやりな態度だ。

でも、俺にも全く分からないので仕方ない。

試しに構造を見る目で見てみる。

名前は……【オークゴブリン】

わお、ゴブリンにはいくつか種類がいそうじゃねえかよ。

しかも何？何でこいつは斧じゃなくて無駄に長い2mはありそうな長剣なんて持つてるの？

あれだとゴーレムでも勝てそうもないんですけど……。

そんなことを考えているとオークゴブリンはこちらに走ってきた。

どうやらオークゴブリンともエンカウントバトルやるみたいです。

7話 魔の森？（後書き）

やっと魔の森入れました。

入らせ方は多少強引ですが、許容範囲ってことにしといてください。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

8話 魔の森？

「あーっ、死んだかな」

オークゴブリンを前にすると、さすがに自信が無くなってくる。

『ルイス、ゴーレム！』

ギンは焦りながらゴーレムを出すように言ってくる。

「うん」

それだけ言って、いつものように錬金術を行う。

掌を合わせ、地面に置く。

一瞬光った後に、目の前にゴーレムが2体現れる。

一度に出せるのも制御えきるのも2体までなので、文字通り本気だ。

オークゴブリンは本体が体長5mはあるのに対し、こちらは3mほどのゴーレムが2体。

普通に戦っても勝てるか分からない。

2体のゴーレムで同時にオークゴブリンに襲いかかる。

思念操作を使って、一体は正面から殴りかかり、その隙にもう一体が背後から一発殴るはずだった。

そう、はずだったのだ。

オークゴブリンの持っていた長剣が光を帯びて、ゴーレムに切りかかる。

そして、ゴブリンの斧では傷一つ付かなかったゴーレムの右腕が地面に落ちた。

何が起きたのか理解できず、俺はただその光景を見ていることしか

できなかった。

オークゴブリンはゴーレムの右腕を切り落とした後に、そのままゴーレムの胴体部に横一薙ぎ。

胴体部が切れ落ちて、ゴーレムの一体が動かなくなった。

ゴーレムの一体が倒されるまでが、僅か5秒ほど。

その短い時間の内に、もう一体のゴーレムが一撃をいれるのには、あまりにも時間が短かった。

何とか背後に回り込んでいたものの、オークゴブリンが振り返りながら横に一薙ぎ。

ゴーレムの胸あたりが真つ二つになり上半身が崩れ落ちる。

どうやらゴーレムは2体とも倒されたらしい。

2体のゴーレムを倒したオークゴブリンが俺とギンの方へ走ってくる。

距離は10mほど

(いける)

またいつものように錬金術を行う。

いつもと違うのは、掌を合わせた後に右の掌を広げて、左手首から1mほど空中を滑らせる。

右手の掌が通過した場所から氷の刃ができていく。

1mほどの氷の刃が完成したところで、オークゴブリンは3mほどの距離にまで近づいてきている。

俺が長剣の間合いに入っただのを確認し、オークゴブリンが長剣を振

り上げ、俺の頭上に振り下ろす。

俺はオークゴブリンよりも早く氷の刃を振り上げ、自分の体の横に振り下ろす。

氷の刃が通った場所から水蒸気が一気に凍りつき、その氷の上を長剣が滑るように流れていく。

大振りして隙だらけになったオークゴブリンの腹に、氷の刃を横一閃。

氷の刃の切れ味がよかったのか、オークゴブリンの右足が切れ落ちる。

5歳の身長で5mもあるオークゴブリンを横に切ったら、足しか切れなかった。

右足を無くしバランスを崩したオークゴブリンは仰向けに倒れる。

倒れたオークゴブリンは、千切た右足の傷口から徐々に凍り始める。5秒もせずに完全に凍りついたオークゴブリンに

ドゴオン

小規模な落雷だがゴブリンに当てたのよりも数倍は大きい落雷が落ちて、オークゴブリンの氷は崩れて粉々になる。

「死ぬかと思った」

緊張が切れて仰向けに倒れ込む。

オークゴブリンの姿を思い出すと、自分がどうしてあんなのに勝て

たのかが不思議になる。

それと、錬金術の強さにビックリもする。

「ねえギン、錬金術で火とか光って出せると思う？」

光はともかく火は出せると強そうだ。

『無理じゃね？』

全くこの狼のような犬のような霊獣は、と思う。

全く可愛げがない。

「それとギンって犬なの？狼なの？」

これからどう考えればいいのか分からないので、一応聞いておく。

『僅かな差で狼の方が近い。雷獣だからあんまり関係ないけど』

雷獣と言言葉のところで自分に雷を纏わせる。

触っただけで感電しそうだ。

「そういえば、ギン、さっきのオークゴブリンが持ってた長剣って魔法剣だよな？」

構造を見ればいいのだが、あまり考えずにギンに聞いてしまう。

『うーん、たぶんそうじゃない？光ってたし』

そう確かに光ってたのだ。たぶんこれで攻撃力を上げてゴーレムを切り裂けたのだろう。

「この剣貰っていいっかか。ダンさんとの修行で剣術を教えてもらってるんだし、良い剣の方が嬉しいしね」

もう言いながら地面に落ちている、2mほどの長剣を拾う。

だが、上がらない。

重すぎて上がらないのだ。

5歳児の体力だと2mの長剣は持ち上げられないらしい。

「なら」

そう言つて

さっきのように掌を合わせ錬金術を始める。

合わせた掌を長剣に置く。一瞬光った後に長剣は1mほどの太刀が一本と60cmほどの脇差が一本に変わる。

柄の部分は空気中の元素と土中の元素から、もう一本と同じように作った。

ついでに鞘も作っておく。

太刀を背中に掛け、脇差は右の腰に掛けておく。

「じゃあギン、熊の魔獣でも仕留めて帰ろっか」

熊の魔獣を太刀で仕留めてみて分かったが、魔力を流せば強度が増している感じがする。

おそらく発動具の役割を果たしているのかもしれない。魔法剣と言うのは発動具に必要な魔法石を材料に含まれているので、魔力を流す時に発動させる魔法の属性の性質を刀に帯びさせれるのだ。

たとえば、炎の魔法を発動するように魔力を流せば、魔法剣は炎を帯びる。

俺の場合は魔法適正がないので剣の強化だけだが……。

試しに錬金術で氷の刃を作るようにやってみると、氷の刃と同じ性質を持ち、切ったところから凍りついた。ちなみに空中の水蒸気も凍らせることができる。錬金術で作った氷は魔力で浮かせることができたので、オークゴブリンとの戦いでしばらく氷が浮いたのはそのせいらしい。俺は保有魔力が多過ぎるのと、魔力制御ができな

いせいで、感情が高まると魔力が垂れ流しになるみたいだ。その量も俺にとっては大したことない量だが、氷を浮かせるほどの量だけつこうな量らしい。

魔法が使えないことがかなり悲しいことだと、ギンから説明を受けて分かった気がする。

「じゃあギン帰るよ」

帰りも来た時と同じように自転車で変える。

いつもと違うのは熊の魔獣の右腕を持って帰ってることだけだ。

熊は大きすぎて持てなかったのだ。

熊は右手が高級食材だと聞いたことがあったので、右手だけ凍らせて持って変えることにしたのだ。

そのためだけに後ろにカゴまでつけた。

帰った後は、初めて魔獣の肉を持ち帰ったことと、太刀と脇差を持って帰って来たことで魔の森に行っていたことがバレて、少々めんどろなことがあったのだった。

8話 魔の森? (後書き)

今回は学校の授業中にケータイのメモ帳に書いてたので、句読点とかがいつも以上におかしいですが、ご了承ください。

誤字・脱字・質問は感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします。

9話 新武器

昨日はオークゴブリンに無事勝利し、今日はダンさんとの地獄の剣術修行だ。

ちなみに今日は昨日手に入れた刀も持ってきている。2本とも持ってくると思うので、太刀は置いてきて脇差だけだ。

「ダンさん、昨日魔の森に行つてでっかいゴブリンを倒して、これを拾ったんですけどどんなものか分かりますか？」

そう言つて脇差を渡してみるとダンさんの顔が少し驚いた表情をする。普段はほとんど無表情なだけに、こうして表情を出す時はけっこう重大な時が多いと、ここ最近の付き合いで分かってきた。

「これは魔法剣だ。魔法石を砕いたものを製造過程で混ぜていて、魔力を流せばそれに応じた魔法を纏う剣だ。だが変だな、俺も冒険者をやっていたが、こんな形の剣を見たのは初めてだ」
どうやら驚きのほとんどは刀を見たことがなかったかららしい。

「でかいゴブリンで魔の森に出るって言ったらオークゴブリンで間違いないと思うが……オークゴブリンって言うとBランクの冒険者が苦戦してやっと倒せるかも知らないのレベルだぞ。それに倒した冒険者から奪ったのかもしれない。ルイスはどうやって倒したんだ？」
やはり、刀ではなくオークゴブリンを倒したことに驚いていたらしい。

「簡単なことです。錬金術で作った氷の刀で凍らせて、ギンの雷で砕きました」

簡単に言っただけ、とでも言いたげな表情をしているが、咄嗟に氷の刀を思いっかなければやられていただろう。

「それで、オークゴブリンは60cmぐらいのその剣で戦ってたのか？」

5mもあるオークゴブリンが60cmの刀で戦ってるのは何となく笑えてくるし、普通は戦いにくだらう。

「いえ、最初は2mぐらいの長剣だったんですけど、錬金術で1mの刀と60cmの脇差にしました。一応は余った塊はここにあるんですが……」

そう言っただけで背負っていたリュックから立方体においていた金属の塊を出す。

「この大きさじゃ、もう一本刀を作るのは無理そうだな。何か作れそうなものでも作るときな」

ダンさんはめんどくさそうに俺に振ってくるが、何を作るのかは興味があるらしい。

「じゃあ……銃なんてどうでしょうか？」

けっこうナイスなアイデアだと思う。物語の主人公とかでも銃を使う人も多いし。

「銃ってなんだ？」

銃が分からないのか、きょとした表情をしている。

「銃って言うのはですね、こんな形をしている金属の塊で、ここを引くと弾が飛び出して遠くにいる敵に攻撃を当てれるんです」

ジェスチャーを目いっぱい使っただけで説明してみると、ダンさんは興味津々と言っただけがお似合いな表情をしている。今日は感情表現豊

かなオッサンである。

「じゃあルイス、今作ってくれ」

無茶な。と言いたいと言えそうな空気じゃない。
て言うよりもアレ？これだけじゃ足りないんじゃない？

「ダンさん」

「なんだ？ルイス」

「材料が足りません」

「……」

「……」

「その脇差いらないんじゃないか？」

しばしの沈黙の後にダンさんがそんなことを言い出した。

「駄目に決まってるじゃないですか。俺は二刀流に憧れてるんですから」

ずいぶんと子供っぽい理由なのは自分でも分かっている。見た目が5歳なんだ、見た目に似合わずではないはずだ。

「剣を二本使う冒険者はいなかったと思うがな……」

ダンさんは考えるような表情をしている。

「魔法石ってどこで取れるんですか？」

錬金術があれば加工はできるので、魔法石が取れる場所さえ分かれば……。

「どこで取れるとかはねえんだ。魔力の強い場所に数百年置いといたら自然と魔法石になってる。小さすぎて使えないものなら、そこらへんの土を掘ったら出てくるが、魔法石は加工できない。砕いたりはできるが固めることはできないし、小さい宝石と小さい魔法石じゃ見分けがつかないから普通は無理だ」
ようするに諦めろってことらしい。

何も言わずにダンさんの家から出て、ダンさんの家の裏、つまり、いつも剣術の修行をしているところに行く。
そしていつものように錬金術を発動させる。
一瞬光った後に、地中に埋まっていた小さな宝石と魔法石が出てくる。ついでに、土中の金属も性質を考えて合金にした塊も作っておく。

俺の後ろでその光景を見ていたダンさんは言葉が出ないと言った表情だ。

そして、魔法石と宝石が無造作に積み上げられた山を見て一つ一つの構造を見る。

魔法石は魔法石で一まとめにして。宝石は宝石で一まとめにする。

最後に魔法石の塊と合金の塊、そして刀を作った残りを練成して一つにする。

少しとっておいた合金を練成して腕輪を作る。その腕輪に取っついて魔法石をはめて発動具を作っておく。

これで、人前でも錬金術が使える。

魔法石と合金を練成した塊をもう一度練成して、銃を2丁作る。

一丁は俺ので、もう一丁は欲しそうにしていたダンさんの分である。

「ダンさん、あげます」

口をパクパクさせた金魚みたいなオッサンになったダンさんに拳銃形態の銃を差し出す。

それを受け取ったダンさんは、一度だけ引き金を引いてみるが何も出ない。

「やっぱりな、俺は魔力が無いからいらねえや」

そう言つて俺に返してくる。

「分かつたよ」

正直2丁拳銃もカッコイイのでよしとするか。

俺も引き金を引いてみると何も起こらない。

「あれっ？」

「魔力を弾にするんだろ？なら魔力こめなきや撃てないだろ」

ダンさんに指摘され、今度は魔力を込めてみる。

銃口が一瞬光つて、発射音もせずに光の弾が撃ちだされる。

木を狙つて撃つたが、弾は木を抉り、木は倒れた。

想像以上の威力だった。

テンションが上がりすぎて頭がおかしくなったのか、もう一つ作つてみたくなつた。

ほとんどの合金が残っているので、それを使つてもう一つ銃を作つた。

だが、今回ののはただの銃ではない。狙撃銃なのだ。スコープのレンズの部分も土中の水晶とかで作ったので、かなり本物に近いかんじになったかもしれない。見たことがあるのがドラグノフだけなのでドラグノフを作る。ドラグノフにも種類はあるみたいだが、俺には

分らない。とりあえず作っちゃいましたよ。

威力を試したかったが、ダンさんに止められた。

さすがに拳銃形態でアノ威力だったのだ。その数倍は大きさがあ
るから、威力も数倍と考えたのだろう。

その後はもう……地獄ですね。

ダンさんとの修行でボロボロになるまで鍛えられましたね。

帰った時に父様に拳銃が見つかって、興味津々だったので貸してあ
げることになったら、さっそく撃ちに行ってしまった。

ちなみに父様は火の属性が得意なので火の弾が撃ち出て、着弾点か
ら火が噴き出したのだった。

その後に「欲しい」と言われたので、仕方なく作ってあげたのだっ
た。

母様がこれだどっちが子供か分からないとでも言いたげな目線を
送ってきたが、無視することにした。

9話 新武器（後書き）

はい、ほんまグダグダです。

かつてないぐらいにグダグダですよ今回は。

書きながら頭の中で数回分からなくなりました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

10話 開花（前書き）

4万PV、1万ユニークまでもう少し！！

たぶんこの話でいくはずです。

総合評価300突破

お気に入り登録数100突破

まだまだですが、これからもよろしくお願いします。

10話 開花

今日はダンさんとの修行はない日なので魔の森に来ている。

母様に気づかれたら、また泣いて怒られるだろうが、まあいいだろう。父様は喜んでいたし。

前回の装備は何もなしで錬金術だけだったが、今回は違う。

魔獣の皮で作ったホルスターに2丁拳銃、万が一のために背中に脇差をかけている。

脇差なのに何故背中？と思っただろうが、5歳と言う身長上の理由が大きい。腰には魔法銃があるので邪魔にしかないのだ。

ちなみに魔法銃は両方とも魔力の弾を撃ちだすだけじゃ面白くないので、片方は改造して氷結弾にしてみた。

拳銃に練成陣掘り込んで、自動リロードまでしてくれる便利な銃になったのだ。

それに着弾点から凍りつくと言う能力付きなので、氷の魔法を使う魔法使いがいるのか分からないが、同等の力は持っていると考えてもいいだろう。全身は凍らないのが欠点とも言えるが。

練成陣を彫って効果が出るのか不安だったが、やってみると案外あっさりとできちゃったりした。

ちなみに脇差の魔法剣にも同じ練成陣を彫ってある。

「ねえギン、今日のお昼は何食べたい？」

魔の森に魔物は現れるが、常に現れ続けているわけではない。むしろ、数時間に一度ぐらいにしか会わないので、魔物に会う確立は低

いと言ってもいいだろう。

なので、基本的には暇なのだ。

道も分からなくなる時はあるが、ギンが匂いで分かるから心配はない。

『兎』

「ですよー」

ギンは一回ハマると同じものをしばらく食べ続けるタイプの奴なのだ。

今回でもう何日目になるか分からないが兎の魔獣をほぼ毎回食べている。

そのうち絶滅するのでは？とさえ思えてくるぐらいに食べ続けそうなので怖いもんだ。

「ギンってさあ、大きくなったらどのくらいの大きさになるの？」
これはけっこう重大な疑問だ。俺よりも大きくなるなら、かなり足の速いギンに乗れば移動の手間がなくなる。

『……たぶん、もののけのお姫様のお母さんの狼ぐらいかな？』
えっ、ちよつと待ってくださいよおー。

それって、『ものけ姫』に出てくるモ一族の口さんですよ？
ここ異世界ですよ？確かに、それぐらい大きくなってくれたら乗れるし、かなり強そうだけど……何でそれ知ってるの？

『何で知ってるの？とも言いたげな顔だな、ルイス』
クスクスと笑いながら、ギンが顔を見上げてくる。

「よく考えてることが分かったね」
なるべく表情に驚きを出さずに、なるべくいつものようにを心がけて対応する。

『頭に直接語りかけてるからな、ルイスの考えとか記憶は軽く共有してるみたいに分かる。それにしてもルイスが元いた世界っておもしろそうだな』

話についていけない。とりあえず言えることは……霊獣さん凄すぎです。

なんかだんだんギンが凄い存在なんだって思えてきた……。

「ねえギン、大きくなったら背中に乗せてよ」
ストレートに言っただけに先に約束させておこう。

『その時の気分次第』
この雷獣は空気が読めないみたいです。

突然目の前にオークゴブリンが3体も現れてしまった。

しかも驚くことに1対はどうみても子供だ。

その子供までもが好戦的でエンカウントバトルやらかしてきそうな空気をガンガンに感じさせる。

「ねえギン、オークゴブリンって家族でお出かけでもするのかな？」
親子3人でのお出かけ中に遭遇しちゃいましたって感じしかない。これって俺がやられるか、逃げるか、逃げさせるか、全滅させるしかない、残された遺族の方が可哀想だな。

『魔物も家族との関係を大切にするとか笑えてくる』
そう言いながらギンはすでに笑っていて、笑いすぎて苦しそうだ。もう放っておいてもいいだろう。

「じゃあ、今回は皆殺し方向で、コレでも試させてもらおっかな」

そう言つて腰のホルスターから魔法銃を2丁抜いて2丁拳銃のスタイルをとる。

ちなみに右手が魔法銃で左手が氷結弾の練成銃だ。

オークゴブリンがこちらに走つてきながら、掌が光つたと思うと、その手には冒険者から奪つたのか槍と斧を持っている。

父親かと思われる大きいオークゴブリンは斧を持っていて、母親らしきのは槍、子供も斧を持っている。

おそらく換装系の魔法を使えるのだろう。

便宜上、父ゴブリン、母ゴブリン、子ゴブリンと呼ぶことにしよう。上位の固体の魔物は魔法を使えると父様の書斎にあった本に書いてあつたが本当らしい。

そういえば最初に戦つたオークゴブリンも魔法剣をちゃんと使つてたし。

距離が4mほどになったところで、父ゴブリンが斧を振り上げた。

その隙を逃さずに右足の甲に氷結弾で1発当てる。

威力はかなり低く抑えたので、痛いだろうが貫通はしていない。少し凍りついてはいるが。

初めて相手に銃撃を食らわせた余韻に浸っていると、左から母ゴブリンが槍での一撃をくらわせようとしてくる。

父ゴブリンを攻撃した時に左手を突き出しているので、氷結弾での対応はできない。

思考するよりも早く、右手が左腕の下にあつた。

気づいた時にはすでに引き金を引き終えていて、魔法銃から光の弾が撃ちだされる。

威力を抑えることなど考えていなかったので、母ゴブリンは跡形も

なく消え去った。

母ゴブリンの方を見ていて反応が遅れてしまったが、父ゴブリンが目の前で斧を振り下ろそうとしていた。最初の一撃のダメージはそれほど受けなかったらしい。

「ギン」

避けられないし、対応もできない。斧でやられる。そう思った時に無意識にギンの名前を呼んでいた。

『何？ルイス』

チラッとギンを見ると子ゴブリンと戦っていて、見た場面は子ゴブリンの首をギンが噛み切った場面だった。

どうやらギンは倒したみたいだが、俺はやられるみたいだ。

斧がすぐそこまで迫ってきていて、咄嗟に腕でガードする姿勢になる。

ガード姿勢ができた時に腕にあたる金属の感触。

それが腕を滑り落ちるような感覚。

「あれっ？」

今の俺は呆れるような声を出していたらう。

だが、それでも仕方がない。

確実に腕は斧に切り落とされ、そのまま頭まで割れていたたらう。

それなのに傷一つないのはおかしい。

斧が腕に触れる感覚はあったのにだ。

何が起きたのか分らない。

だが、チャンスなのは変わらない。

氷結弾の威力を最大にして父ゴブリンの腹を貫通させる。
着弾した瞬間から父ゴブリンの全身は凍りつく。

貫通した弾が当たった地面は直径10mほどが完全に凍っていた。
何とか勝てたらしい。

『ルイス、あのタイミングでよく避けたね』

ギンには避けたと思われてるらしい。

自分でもそう思いたいぐらいである。

「確かに斧が当たった感覚はあったんだけどなあ」

思わず呟いてしまう。

『ふーん、じゃあ、あの時にちよつとだけ感じた魔力の流れはルイスだったんだ』

この霊獣は何か言い出したが、よく意味が分からない。

「魔力の流れって……魔法銃で使ったんじゃないか？」

『うん、あの時は魔法銃は使ってなかったから、ルイスが魔法使ったんだと思うけど』

ギンはそう言っている。

そこで少し前にリア先生に言われた言葉を思い出す。

俺には先天性の魔法が眠っている。

少しの魔力しか動いてないのも、先天性の魔法だと考えると納得できる。

命の危険を感じて本能がその力を開花させたのかもしれない。

この魔法はもしかしたら……物理攻撃を無効化させる先天性魔法

「ねえギン、たぶんこれって物理攻撃を無効化させる先天性魔法だ
と思う」

一応は考えたことをギンには言っておく。

『じゃあルイスと喧嘩する時は魔法使って雷だけで攻撃する』
そんなことを言い出した。これからは喧嘩しないようにしよう。

今回のドロップアイテムの武器はシヨボそうだったので持って帰ら
なかった。

「じゃあギン、早いけど帰ろっか」

そう言って今日は疲れたので帰ることにした。

魔法銃の実践デビューした結果はなかなか使えるみたいだ。
それに先天性魔法にも目覚めたから、後は自由に使いこなせる訓練
を積みばいい。

帰る時に魔獣の兎を狩って帰ったら、母様に泣いて怒られたが、も
う諦めてくれたらしい。

ちなみに兎はギンが全て食べてしまいました。

10話 開花（後書き）

ちょっと武器を変更するために強引に持って行ってしまいましたね。
分かってるけど氷結弾の方がカッコイイって思ってしまったので…
…。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6840x/>

転生したら錬金術師

2011年10月31日19時51分発行